資料３

第７回世界のウチナーンチュ大会に対する提言書（案）

海外ネットワークに関する万国津梁会議

Executive Summary

第７回大会「With コロナ時代における世界のウチナーンチュ大会」に対する提言は、海外ネットワークに関する万国津梁会議にて議論を託された諸課題と関連させた。

ハイブリッド開催では、メディアを利用した沖縄―世界の双方向発信によるオリンピック方式を提案。第７回のレガシーは「心を寄せてもらう機会」「絆やアイデンティティ再確認の機会」とし、シンカ意識を実感できるための実践として、コロナ禍の救済クラウドファンディングやワールド・ウチナーンチュ・バザールのオンライン開催を提案する。

I. はじめに

海外ネットワークに関する万国津梁会議では提言書をとりまとめたところだが、知事から追加議題が提示されている。テーマが「With コロナ時代における世界のウチナーンチュ大会」についての議論である。

そこで第１回目の会議が令和４年１月５日に開催された[1]。会議では、「With コロナ時代における世界のウチナーンチュ大会」に関して、資料に基づき各委員の意見の発表と議論が交わされた。

会議では多様な議論が交わされたが、本提言書では海外ネットワークに関する万国津梁会議で提示された課題とそれに対する提言を意識してまとめることに努めた。構成は、II 章で Executive Summary で記載した内容に対する、より詳細な説明を記載した。次に III 章では、前章の根拠となった議事録を、委員の発言や資料別に分類し掲載し、最終章の IV 章は、提案内容を解り易く箇条書きをした。

II. 第７回世界のウチナーンチュ大会に対する提案内容（委員別）

海外ネットワークに関する万国津梁会議は、沖縄県振興審議会において重要性を増した課題として、ウチナーネットワークの継承・拡大が掲げられた。また海外在住の県系人の世代交代が進む中、若者の県人会活動等への参加が減少傾向にあるなど、ウチナーンチュとしての意識、アイデンティティの低下が懸念されているという意見が付された。更に、同付帯意見に加え、沖縄 21 世紀ビジョンの将来像「世界に開かれた交流と共生の島」の実現に向け基本的課題として示された海外ウチナーネットワーク

[1] 会議の名称は、第６回海外ネットワーク万国津梁会議。配布資料は、(1) 委員名簿、(2) 配席図、(3) 海外ネットワークに関する万国津梁会議テーマ「With コロナ時代における世界のウチナーンチュ大会」、(4) 第７回世界のウチナーンチュ大会　基本コンセプト、(5) 第７回世界のウチナーンチュ大会実行委員会委員名簿、(6) 第７回世界のウチナーンチュ大会日程案、(7:追加) 世界のウチナーンチュ大会イベント案、であった。

の「活用」についても課題として追加があり、よって世界のウチナーネットワークの継承・発展に向けた課題として次の 4 つが挙げられ、それぞれ提言がなされた[2]。

課題 1 ：若者の県人会活動等への参加が減少傾向

提言➡ a. オンライン、オンデマンド文化交流
b. 老若男女（世代を超えた）オンライン交流

課題 2：ウチナーンチュとしての意識・アイデンティティーの低下

提言➡ a. ウチナーンチュ意識の見える化
b. ネット上のウチナーンチュ・プラットフォーム基盤（WUN）
c. 移民学習の機会

課題 3: ウチナーネットワークの沖縄経済の自立的発展への有効活用

提言➡ a. 信頼関係の構築
b. 繋ぎ方で大いに活用
c. 海外と県内の企業のマッチング

課題 4：海外ネットワークの県内活動拠点

提言➡ a. 物理的なウチナーンチュ・プラットフォーム基盤
b. 県庁内の情報共有と情報継承（アーカイブス）

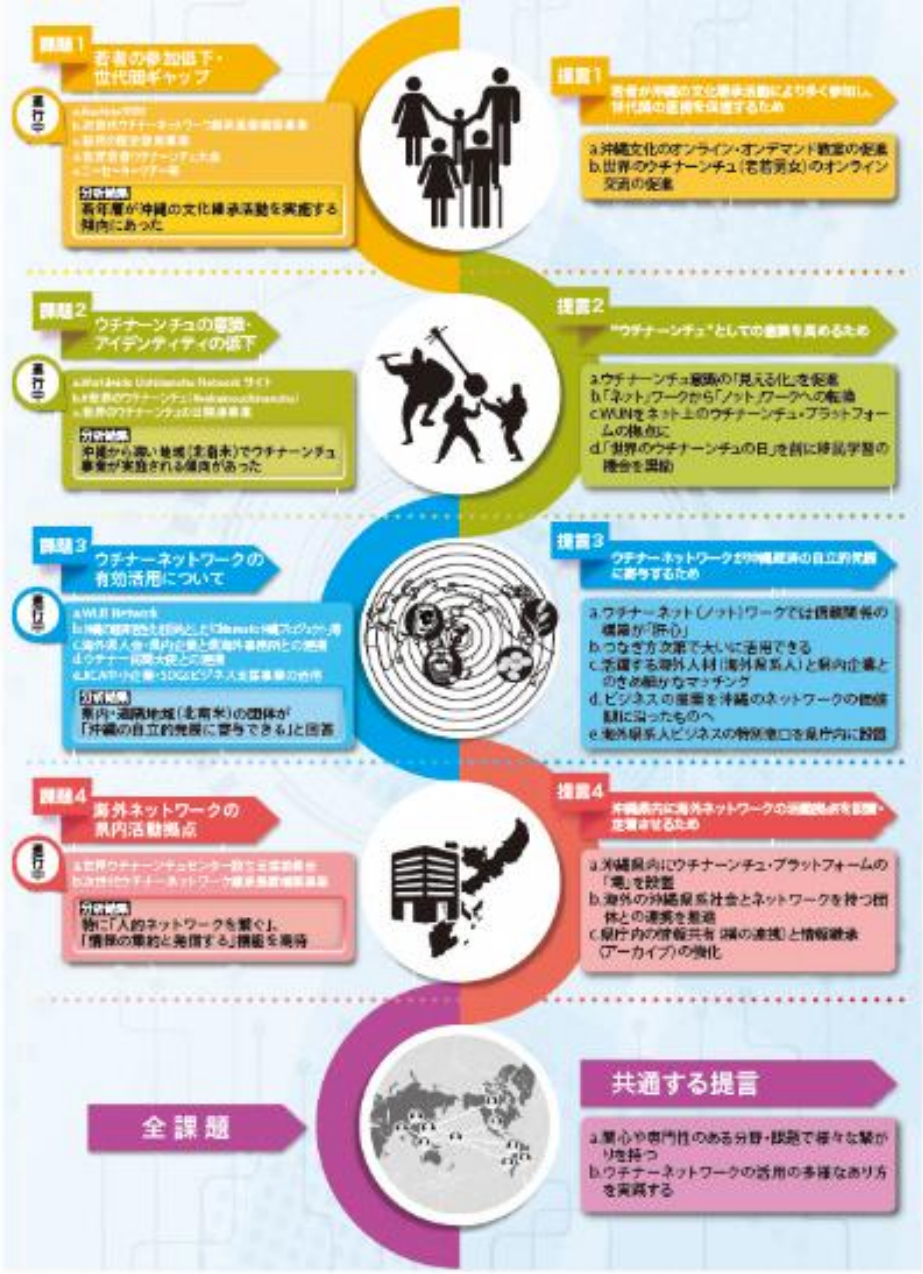
共通課題

提言➡ a. 関心や専門性のある分野や課題で様々なつながりを持つ
b. ウチナーネットワークの活用の多様な在り方を実践する

同会議では、令和 3 年 10 月に提言書としてまとめ県知事に手交した。それら 4 つの課題と提言は以下の概要図のとおりである（図 1）。

[2] 掲載した提言は一部である。

図１：海外ネットワークに関する万国津梁会議 概要図



第７回世界のウチナーンチュ大会を開催するにあたり、これら４つの課題に基づいて考えをまとめ、提言することは意義がある。なぜならば、過去６回の世界のウチナーンチュ大会は、世界各地に居住している県系人や、県民、沖縄に縁のある人々とのネットワークの構築を図り、次世代へ継承、発展させていくことを主な目的として開催されてきた。一方で、海外ネットワークに関する万国津梁会議は、世界のウチナーネットワークの継承・発展のための課題を解決するための議論を重ねてきた。第７回大会は、海外ネットワークに関する万国津梁会議の提言を実践し、その実現性と効果を試す良い機会である。

無論、開催までの時間や実施期間に限りがあることから、すべての提言を試すことはできない。更に全ての提言がこの時期に実効可能とは言い難い。そのため今回の議論では、海外ネットワークに関する万国津梁会議での提言を意識しつつ、第 7 回世界のウチナーンチュ大会で実効可能なことは何か、改めてアイディアを出し合い議論した。

令和 4 年 1 月 5 日の本議題に関する第 1 回目会議（第 6 回海外ネットワークに関する万国津梁会議）では、各々の委員や大会担当部署（大会実行委員会事務局）が意見を出し合った。以下の表は、各発言を項目別に分類し、更に課題別に色分けした。図 1 の色に合わせて、課題 1 が黄、課題 2 が緑、課題 3 が青、課題 4 が赤、共通課題が紫、大会に関する発言は白とした（図 2）。

発言の傾向として、事務局、安里委員、UNC（ウチナーネットワークコンシルジュ）は課題 1（若者の参加低下）について、新垣秀彦委員と佐野景子委員は課題 2（ウチナーンチュ意識の向上）について、新垣旬子委員と新垣誠委員は課題 3（沖縄経済の発展）について、佐野景子委員と新垣誠委員は共通の課題についての意見が比較的多かった。巻末資料として、議事録に基づき発言者別に意見をまとめたものを掲載している。下図内の記号は各意見の文頭に付した記号を指す（図 2）。

図 2: 第 6 回海外ネットワークに関する万国津梁会議の各委員の意見（課題別）

事務局	小川寿美子	新垣旬子	新垣秀彦	安里三奈美	佐野景子	新垣誠	UNC
(1a)	(2a)	(3a)	(4a)	(5a)	(6a)	(7a)	(8a)
(1b)	(2b)	(3b)	(4b)	(5b)	(6b)	(7b)	(8b)
(1c)	(2c)	(3c)	(4c)	(5c)	(6c)	(7b)	(8c)
(1d)	(2d)	(3d)	(4d)	(5d)	(6d)	(7c)	(8d)
	(2e)	(3e)	(4e)	(5e)	(6e)	(7d)	(8e)
	(2e)	(3f)	(4f)		(6f)	(7e)	(8f)
	(2e)	(3g)			(6g)	(7f)	(8g)
	(2f)	(3h)			(6h)	(7g)	(8h)
	(2g)	(3i)			(6i)	(7h)	(8i)
	(2h)	(3j)			(6j)	(7i)	(8j)
	(2i)	(3k)				(7j)	(8k)
	(2j)	(3l)				(7k)	(8l)
		(3m)				(7l)	
						(7m)	
						(7n)	

III. 第７回世界のウチナーンチュ大会に対する提案内容（課題別）

（１）課題１を解決するために大会でできる試み

第７回世界のウチナーンチュ大会はハイブリッドで開催するため、様々なチャンスがあるといえる（1b)。第６回の参加申し込みはHP上で一部抽選で、対面のみの参加形態であったため、収容人数に制限があったり、渡航し会場まで移動できるかなど経済的な制限があった。しかしオンライン開催は転換期であり(1c)、第２世代のウチナーンチュ大会として、#Uchina1000のように参加のための移動が必要なく、気軽に世代間を超えての参加が容易となった(3j)。オンライン開催はまた、一人でも参加できる世界のウチナーンチュ大会などのキャッチフレーズ(8h)、条件を設けずに参加できる仕組みづくり(8i)、県内の一般住民が参加しやすい仕組み(8c) 、個人でウチナーンチュ大会に参加する仕組み(8a)が期待される。コンシェルジュによる県民周知も期待されている(5d)。

大会の開催は、テレビ局を通じた県民へのアナウンス(3b)をし、県民の参加、気運の醸成が一番重要である(4a)。24時間、地球の表裏で繋がる(2g) 、テレビで５日間、昼夜を大会一色にするのはどうか(2i)。

若者からのイベントの提案には、音楽、クイズ、スポーツ(2e)、オンラインスポーツ、エイサー交流(5b)などがあるが、ハイブリッドによるイベント開催には関係者が作り上げる難しさもある(8e)。

（２）課題２を解決するために大会でできる試み

誰もが沖縄に心を寄せる良い機会(6f)、ウチナーネットワークに関わりたいと思うような発信を心がける(6g)。また教育委員会や141の実行委員会がどう巻き込まれ自主運営するかに期待したい(4b) 。県民への周知は時間帯を考える(3e)。例えばゴールデンタイムと思われる９時に学校現場とつながるイベントを盛り込んだり(8j)、実行委員会の企業に呼び掛けてプログラムに参加してもらえるような仕組みづくりなど(8d)。沖縄県行政職員が部局の担当業務を検討し、できることはないかと議論していただきたい(4d)。

若い世代間では沖縄の言語や文化、ユイマールなどの価値観や相互扶助の地域生活が失われつつある(7c)。教育関連イベントの継続浸透、落ち着いて学ぶ、考える場(6a)、半年前から大会関連行事を実施するなど(2h)して、素晴らしい大会を次世代の子どもたちの育成のために(4e)教育現場からスタートし種を撒く(8l)。

市町村では、2~3の移民輩出市町村と意見交換(4f) したり、市町村に資料展示を提供(8k)し、６月から各市町村との横の連携を。実施者が主体的に盛り上げるような仕組みを(4c)。

県市町村図書館、博物館による企画展示を開催(6b) し、一般県民と如何にネットワークをつくるか(3d) 、移民の歴史、料理、交流、紹介(2e) オンデマンド教材、クイズ(6c)など、数多いアプローチからニーズのマッチング(2b)を考える。

一方、移民の歴史学習は意識や共感を生み出すには不十分(7f)ではないか、そのため大

会開催の意味は、この世界的受難をウチナーンチュ「シンカ」意識を持って、「世界の輪」というグローバルネットワークで、どう乗り切れるかであろう(7d)。

（３）課題３を解決するために大会でできる試み

ワールド・ウチナーンチュ・バザールのオンライン開催（7j）を提案する。例えば、大会のグッズやファッションの販売を担当し、売り上げを世界的にウチナーンチュのコロナ救済に充てるような取組が出来ないか(7j)。「シンカ」意識は経済的支援「模合」を通した相互扶助で形成される(7b)。ユイマールを実感・共感する仕掛けとして、クラウドファンディングの仕組みを利用したチャリティー募金を事業の一環とし(7h)、海外から沖縄への募金が集まり支援の有難さを感じる事が出来れば、沖縄県内でも自分たちが世界の輪の中のウチナーンチュシンカであることを意識してもらえるのではないか（相互扶助の追体験）(7k)。ウチナーネットワークは、多様性に支えられた寛容性によって成り立つ協働を基調とし、その多様性は世界に広がる人的関係資本にある(7n)

沖縄、世界の企業の産業を全国につたえ県経済への貢献に(3i)つなげること。沖縄ではツールはあるが、それをどう構築するかが肝要(3f)であり、システムよりパーツをニーズと繋ぐシステムを(3h)考えること、物産を強化し(3g)、通販、通信販売、就労支援(2e)の機会とする。

日頃からできることを積み重ね、パーツをコーディネートする(3l)。例えば、産業まつりをオンライン配信で大会連携イベントに(5c)することなど。

（４）課題４を解決するために大会でできる試み

過去も含め今回の大会の経験の蓄積をすること(2c)。それと同時に移民関連の資料収集とアーカイブ化を試みる(2j)。ウチナーネットワークコンシェルジュに持続可能な活動への支援、仕組みづくりを期待したい(5e)。大会参加者が一緒に取り組むこと、次のステップにつながるような仕組みづくりを目指し(8f)、交流から次につなげる部分で企業や先輩たちの指導を期待したい(8g)。

（５）共通課題を解決するために大会でできる試み

第７回のレガシーはハイブリッド(1d)だけであろうか。ハイブリッドはツールであるのでツール以外のレガシーが必要と考える(2f)。また大会はイベントの羅列でなく、何か一つ繋ぐものがあるとよい(6h)。たんなる”Festival”（祭り）として大会を開催することに違和感を感じる(7g)。

第７回大会のレガシーはシンカ意識を実感すること。そのために必要なのは共感のコミュニティの形成であり、自分の行動が大きな歴史の流れの一部であると感じるときに、人は共感し、共同体の一員であるという意識を持つ(7f)。アイデンティティの言語化のためには実践し、共有し、共感の輪を広げて結んでいく必要があるが(7e)、例えば募金支援は

ハワイのウチナーンチュ・コミュニティで試み、受容されている(7i)。世界へ開かれるグローバルな意識と、ウチナーンチュという極めてローカルな意識の二つのベクトルを意識しつつ、そのバランスを取りながら事業を展開するのはどうか(7l)。

真髄は、パンデミックのようなグローバル危機を、国家の枠を超えて共に乗り越えていくソフトパワーにある(7m)

海外からの発信も大会の一部とし(6d)、県民参加、県民周知の点からもオンライン開催はメリットがある(5a)。

（６）大会について

海外ネットワークに関する万国津梁会議の提言を意識した意見(2d)として、第 7 回大会は「アイデンティティの確認」がチャレンジングなテーマ(7b)ではないか。アイデンティティ、絆の再確認の機会(6i)とし、過去の大会のような皆がシェアできる強い取組があるとよいのでは(6j)。沖縄の Wi-Fi 環境を強化し(3c)、沖縄発信の大会のみならず世界からも発信される双方向の大会が実現できる(6e)。双方向であれば 24 時間のライブ・録画を織り交ぜ、YouTube とテレビを織り交ぜて発信するオリンピック方式 (2a)により、県民はもとより県人会に所属しない海外のウチナーンチュにも大会の様子が届く可能性が高くなる。

Ⅳ. おわりに

第 7 回大会の開催において実施することにより、それぞれの課題を解決できると期待できる企画やアイディアの骨子を以下に列記する。

（1）課題 1 を解決するために大会でできる試み：

誰一人として取り残さない、誰もが参加できる大会：＃UCHINA 10,000

（前回大会参加者 7,000 余名を上回ることを目標に）

（2）課題 2 を解決するために大会でできる試み：

実行委員会（企業・行政）みずからがウチナーネットワークに巻き込まれて半年前から自主企画を

（3）課題 3 を解決するために大会でできる試み：

ワールド・ウチナーンチュ・バザールのオンライン開催、クラウドファンディングによるコロナ禍支援募金

（4）課題 4 を解決するために大会でできる試み：

移民関連の資料収集とアーカイブス化、ウチナーネットワークコンシェルジュの役割強化

（5）共通課題を解決するために大会でできる試み：

第 7 回大会のレガシーは、シンカ意識を実感できるための実践（募金）を通じた共同体の一員としての意識の高揚

以上

資料：

1．発言者別意見
2．世界のウチナーンチュ大会　イベント案
3．学生（若者）のアイディア集

発言者別意見

1. 大会実行委員

(1a) シンカとは沖縄の言葉で「仲間」という意味であり、世界のウチナーネットワークを担うシンカこそが真の価値（真価）であること、また、コロナ禍において人との繋がりが求められている今こそ、ウチナーンチュ大会を通じて世界のシンカ同士の輪を結び、更なる発展を遂げることができるとのメッセージが込められている。（宮城清美　大会準備室室長）

(1b) 今回のハイブリット開催は一つのチャンス（オンラインによって、今まで参加ができなかった方たち、県民でこれまで知らなかった方たちにウチナーンチュ大会を知って頂ける。（宮城清美　準備室室長）

(1c) 前回終了から次の５年間何をしたらいいかということに関し、県人会や民間大使の方等を含め、例えば交流に関心を持たれている方たち皆さんと話し合いを持つ場があり、生まれたのがウチナーンチュの日の様々な取組である。今回の大会はオンラインも表立って使うことによる転換期。新垣旬子委員が述べたように、今まで参加できなかった方たちが、少なくとも見られるようにはなってくる、大会参加のためには現地で集まるしかないわけではなく、今回からは沖縄に来られなくとも大会の様子が感じられるようになる、あるいは場合によっては、大会の一部として双方向で参加できるようになるという転換期になると思う。第８回以降の大会に向けても、今回のハイブリット型式をさらに発展させるような大会にしていきたいと思う。（川上睦子　統括監）

(1d) 第６回大会はウチナーンチュの日を作ったこともレガシーの一つ、第７回はハイブリットを通して、なにがしかのやり方、レガシーが残っていくのではないか。そういう話し合う機会もぜひ、持てたらと思っている。（川上睦子　統括監）
・次回の実行委員会の会議までに、北米・南米のオンラインキャラバンを終了し、それも含めて、実行委員会の委員に紹介しつつ、いろいろご意見伺うことを予定している。（宮城清美　準備室室長）

2. 小川委員長

(2a) 「オリンピック方式」について。第７回世界のウチナーンチュ大会は、オンラインを取り入れるということもあり、コロナ禍においてどのような新しい試みができるかということを考えた場合、「オリンピック方式」、即ち世界に発信することを意識し、日本時間の昼間だけ行うのでなく、24 時間開催するという提案である。

例えば、テレビ会社に協力いただき、日本の真夜中の時間帯に日本でのイベントの様子を録画配信し、更に地球の反対側のブラジルやアルゼンチンでのイベントの様子をテレビを通じて日本・沖縄にてライブで観賞できるようにする。YouTube という方法もあるが、テレビの方が県民の方に観てもらう機会がより広がる。これにより懸念事項であった県民の「世界のウチナーンチュ大会」への関心・参加・意識が一層高まると思う。

(2b) 「Ready Made から Order Made へ」と記載したが、そこで、２番目の説明に戻るが、大会の数か月前から、それぞれ日本側、沖縄側から、こんな交流をしたい、こういう人と会ってみたい、すなわち、様々な情報交換のマッチング伝言板のようなものをどこかに設ける。そして、大会期間中に沖縄に滞在する人が、沖縄滞在期間を有意義に過ごしてもらえるよう、ニーズのマッチングをするようなネット上の伝言板を作るのはどうか、ということである。

(2c) 大会経験の蓄積である。つまり、大会のその年で終わりにするのでなく、過去にどういったことが世界のウチナーンチュ大会で行われてきたかについて、過去第１回目から第６回目に作成した報告書などの資料をしっかりとアーカイブ化し、過去の蓄積を見える化すること、そして今回の第７回大会において集まる様々な資料や動画等をしっかりアーカイブ化し、いつでも見られるような、そういうシステム作りに努めるということ。

(2d) 「海外ネットワークに関する万国津梁会議」で議論した４つの課題解決のための提言を意識しながら、第７回世界のウチナーンチュ大会のイベントを仕込むことも良いのではという案。参考までに、抜粋ではあるが学生のアイディアを 46 案、表にまとめた。万国津梁会議の 4 つの課題と学生のアイディアが関連すると思われる場合は、表の一番右側の欄に番号を付した。

(2e) 若者（学生）のアイディアについて説明する。名桜大学では「国際学入門」という科目があり今回２回ほどウチナーンチュに関する講義があった。１回目は、伊佐正さん、玉城直美さんが、特にヤンバルの移民に関するお話を、２回目は、今回の会議にオブザーバー参加している比嘉千穂さんが、世界の若者ウチナーンチュ大会に関するお話をしてくださった。２回の講義を受けて、受講生計 203 名のうち 176 名が自分たちなりの世界のウチナーンチュ大会で開催するといいのではと思うイベント案を提出した。これらを計量テキスト分析ソフトで分類すると主に八つの提案に分けることができた。キーワード別に「移民や歴史」、「音楽・言葉、語る」、「踊る」、「料理・地域」、「理解・深める、披露・紹介」、「楽しむ・感じる、動画・クイズ・ゲーム」、「オンライン、スポーツ」、「沖縄・世界、交流・知る」であった。具体例として、通販・通信販売、遠隔、クイズ、オンライン交流、動画コンテスト、プレゼント交換、さらに、連続動画を撮影、沖縄の伝統工芸、か

たやびら、ウォークラリー、ものづくり等があった。就労支援というアイディアもあった。「喜友名諒」選手を招待・招聘する案やみんなでモニュメントを作ってみよう等、若者ならではの案が出た。

(2f) 第 7 回大会のテーマ性、レガシーについて、前回は世界のウチナーンチュの日であり、ある年は WYUA の結成であり、ある年は WUB の結成であった。今回の大会でも、ツールとしてのハイブリット、オンライン開催というもの以外に、何か記念となる共通テーマ、レガシーを掲げるといい。

(2g) ハイブリットで世界と繋がれる。会場は沖縄のセルラースタジアムだけではないということを逆にアピールする。また昼間だけのイベントでなく 24 時間、つまり、私たちから見て地球の裏側に住んでいる人たち、世界のウチナーンチュの人たちと 24 時間繋がれるような何か時空を超えたライブイベントに発展できたら素晴らしい。イベント会場も、資料 1 に記載の主要会場だけでなく、小さな地方の会場でもそれぞれの場で開催するイベントを中継して世界にライブや録画で発信していく。

(2h) 日常の中で世界のウチナーンチュに関して考える機会を半年前から実践しはじめ、今までとは違ったシステム作りへの挑戦を行うべき。

(2i) 日本のテレビ会社の方のご協力が頂けたら、例えば、沖縄の真夜中、つまり南米や北米の昼間に実際にライブで行われている世界のウチナーンチュ大会関連のイベントなどの模様を、沖縄の真夜中に配信してもらう。恐らく真夜中でもテレビを見る方はいらっしゃると思う。そのように、うまく 24 時間を活用する。オリンピックのライブを見たい場合は、私たちも真夜中に起きて観戦するように、視聴者は確保できると思う。そのようなイメージで 5 日間の昼夜を大会一色にできないものか。

(2j) 第 7 回大会で世界のウチナーンチュ一世の写真やパスポートなどの品そのものや、その写メを取って収集するのはどうか。世界のウチナーンチュに関するアーカイブス化を推進する上で大切な試みではないか。

3. 新垣旬子委員

(3a) 第 7 回大会がハイブリッド形式であれば、ネットの環境作りが重要だが、沖縄は Wi-Fi のインフラが不十分。多様なプログラム作り実施しても、ネットインフラが未整備では発信できるのか。

(3b) テレビ局を通した県民へのアナウンスというのはとても重要。

(3c) 今回の大会においては、次の大会や、さらに 10、20 年後のためのベース作りができるのではと考える。Wi-Fi の強化は、とても大きい問題になってくるかと思う。

(3d) このイベントのターゲットは全世界のウチナーンチュであり、ネットを活用しないと全世界に広がらない。海外の県人会、ＷＵＢとの交流の中でネットワークはできているが、一般県民とはいかにネットワークを作るか、そうした手法をどう組み込むのかというのは大会を成功させるために重要。

(3e) 県民への周知と参加を促すため、学校や県民が仕事にいっている時間を踏まえ、どのような時間帯が良いのかということ。沖縄が中心なのか、国外、県外が中心なのか、バランスをどう取るかということも、大きな考えの中で構築しないといけない。多大な準備をしていると思うが、どのように総括するかも、非常に重要。

(3f) 若者が希望するイベントとして「企業フェスタ」、「就職の問い合わせが多い ⇒ 世界のウチナーンチュにとって就活しやすい環境作り」や、「沖縄に住むウチナーンチュが世界で働く環境作り」等、また、「国際観光地としての沖縄」や、県産品の魅力を理解してもらう産業まつり、伝統工芸品の紹介・ワークショップ等、があるが、沖縄では既に準備ができていると思う。1000 万人の観光客に対応する準備は何十年も行ってきたので、沖縄の至るところにそのツールは出来ている。それらをどう構築するかが肝要。産業まつりや離島フェア等、そういう組織が多く出来ているので、そうしたことを実施するのは問題ない。

(3g) 大会のハイブリッド開催は良いと思うが、沖縄では Wi-Fi が足りず、すごく遅い。観光客が入ってくるともっと厳しい。

(3h) 物産の強化については、今後の沖縄は、このウチナーンチュのネットワークを使って、遠いアルゼンチンやブラジル、そして香港などに向けても国際化していくのであり、また、TPP には農連などが多く参加しているから、そこに参加している中に、いかに私たち沖縄やウチナーンチュが、県内において国際力を発揮できるかということだ。ウチナーネットワークには、多くの海外の方々がいるから、そういうチャンスは生かしやすいと思うし、それを大いに行って頂きたいと思う。

(3i) 使い切れないくらいあるたくさんのパーツ（企業、産業、事業）を組み立て、いつでも使えるように自立させていく。システムを大量に作るよりも、パーツをニーズのある人や地域と繋ぐシステムの構築で着実に発展できる。

(3j) 沖縄の県産品は物産だけではない。沖縄の企業の生産物を海外に伝え、なおかつ、世界にいるウチナーンチュの産業を沖縄がいかに全国に伝え、全国から沖縄経由で、ウチナーンチュのネットワークを使って、世界中に展開できるかということにおいても、大会を通した県経済への貢献ではないかと思う。

(3k) 30 年経った今回第 7 回大会は、次のステップとして、第二世代のウチナーンチュ大会として、「Uchina1000」（※WUB 主催オンライン交流イベント）で老若あらゆる世代が参加可能である会議で県全体がウチナーンチュみんなでの将来がどういうふうに進んで行くのかということを考える機会はひとつ芯となり、プログラムを育てていくことができる。

(3l)これまで会議等で何回も話してきたと思うが、沖縄が長年培ってきた準備できているものと、世界のウチナーンチュで 30 年培ってきたものどう融和させるか、どういうふうに相乗効果をもたらすかという手法も、今後の問題だと思う。

(3m) 日頃からできることを積み重ねる。そういう時に集められる私たちが、それぞれのパーツをどうコーディネートして大会を作るのかということだと思う。そこを是非考えて頂ければと思う。

4. 新垣秀彦委員

(4a) 海外ネットワークに関する万国津梁会議の中で、若者の参加が少ない、県民の参加が少ないといったことが課題として挙げられている。その中で、今回の With コロナの中の世界のウチナーンチュ大会というテーマについては、県民の参加、もしくは機運の醸成といったものをどのようにしていくのかが一番重要なポイントではないか。

(4b) 海外ネットワークに関する万国津梁会議で 4 つの課題に関する提言を記したが、移民学習の機会の奨励が挙がっていた。その中で、教育委員会との連携、もしくは市町村も含めて、そこをどのように、事務局、もしくは県が、もしくはこの実行委員会が、141 の実行委員会の皆さんをどう捉えて、巻き込もうとしているのかということ。つまり、今、名桜大の学生が巻き込まれて、自分たちが主体になって、ウチナーンチュ大会をやるとしたら、どんなことをしたいかと議論している。我々や行政、各企業がこうしたことに参画して、特に学生を参加させるために取り組めば、学生自身が作りこんで、自分たちが自主運営するということだ。

(4c) 世界のウチナーンチュ大会の 5 日間はグランド大会として、6 月からは各市町村がこの 10 月のグランド大会に向けて、意見調整しながら作りこんでこの大会に関わっていく

という横の連携があってもいいのかと思う（11 月 2 日の平日に市町村が主としてイベントを実施とあるが、5 日間に無理やり押し込んでいないか)。沖縄の「ワンからワンから（私から私から)」ではないが、このウチナーンチュ大会を、実施者が主体的に盛り上げるような仕組みが必要。あらゆる主体が、どう考えるかについて実行委員会委員の皆さんにも、是非考えていただきたい。

(4d) 海外ネットワークに関する万国津梁会議の提言書を共有していただきたい。交流に限らず、教育もしくは企業とのマッチングをどう考えていくのかも重要。実行委員会の委員は民間の多くの方々にお願いしているが、沖縄県の行政の職員が、自分の部局の担当する業務・政策について、このウチナーンチュ大会に関わるものを、一つ一つ、つぶさに検討し、その中でできるものはないのかと議論されてこそ、この大会が浮き立つと思う。やっぱり縦で割ってしまうと、With コロナのウチナーンチュ大会は、これまでのウチナーンチュ大会と変わらない状況になる。そうであれば、先ほど説明したが、子ども達にどう継承していくのかという点で、これからのウチナーンチュ大会では本当に毎回これをリピートできるような仕組みが必要。

(4e) 市町村、学校現場の役割が重要である。移民学習に関して、教育の各段階で何らかの深まりが掴めないのかなという気もする。ウチナーンチュ大会のような取組は全国的にも無く非常に素晴らしいことと評価を受けている。そこから大会の実施だけではなくて、次世代の子どもたちの育成のために、そういう視点で取り組んでいく必要がある。

(4f) 教育・学校現場からの広がりについて、子どもが家庭に、家庭が地域にというところで浸透しやすいかなと思っているので、特に全市町村というわけではないが、移民を輩出している市町村、２、３の市町村と意見交換をしてもいいのかなと思う。そこは是非時間の許す限りご検討して頂きたい。

5. 安里玉元三奈美委員

(5a) これまでのウチナーンチュ大会を振り返ると、課題のひとつに県民周知がある。今までは、このウチナーンチュ大会のバランスというのが、世界のウチナーンチュが中心だった大会だったが、今回、このコロナ時代において、視点を県民に当てることが考えられると思う。オンライン開催は、比率でいうと対面２、オンライン８ぐらいだと思っているが、このオンライン開催のメリットとして、県民参加、県民周知を図る大会を目指すといいのではないかと考える。

(5b) オンラインになったことで今までできなかったプログラム内容を開催していくことが可能になってくるので、例えば、学生のアイディアにもあったが、世界各国に飛んで行っ

て、オンライン上で交流ができるだとか、オンラインスポーツ大会であるとか、オンライン上で学校、そして学生の交流もあると思う。そして昨年、福建省がエイサー交流等をオンラインでしていたと思うが、エイサー交流なども可能になってくると思う。

(5c) 先程の産業まつりに関連して、まつりが一週間、ウチナーンチュ大会は一週間予定しているが、他のイベントと連携して、例えば、産業まつりを世界のウチナーンチュ大会の連携イベントとし、海外のウチナーンチュも、産業まつりをオンライン上で見られるようにすると、一週間だけではなくて、年間を通して大会に向けた盛り上がりにもなるかなと思っている。

(5d) ネットワークコンシェルジュに関しては、特に県民周知を期待している。今まで県民周知がすごく課題となっていたので、教育機関と連携して若い世代への海外移民や海外のウチナーンチュの存在を伝えていって欲しい。

(5e)ウチナーネットワークコンシェルジュには、持続可能な活動への支援、仕組み作りというのも期待をしている。海外のウチナーンチュ、今ボリビアに住んでいて海外のウチナーンチュ社会にいるが、そこと連携しながらできることもたくさんあると思うので、そこに住んでいる一人として何かしら一緒に頑張っていきたいなと思っている。

6. 佐野景子委員

(6a) イベントだけではなく、落ち着いて学ぶ、考える場というのもあっても良いのかなと思う。偶然にして復帰 50 周年とも重なる第 7 回大会は、やはり沖縄の歴史を振り返る、みんなに分かってもらう、心を寄せてもらう良い機会でもあると思う。この大会で楽しく盛り上がるだけではなく、この機会にやはり関心を持って、学んだり考えたりする機会も提供して欲しいと考える。

(6b) 県や市町村の図書館や資料館、博物館などで継続的に、このウチナーンチュ大会が行われる年に合わせて何か企画展示などを開催してもらい、きちんと連動するようにして、それらも含めてのウチナーンチュ大会であるということが分かるとよいと思う。

(6c) オンラインは多分活用して、オンデマンドの教材として、クイズ等を行うとか、学んでみるとか、それで賞品が出て、グランド大会で何らかの表彰をされるとか、うまく連携して、継続的に、この 5 日間のみならず、継続的にウチナーンチュ大会にちなんでいるということがわかる仕掛けになるといいのかなと思う。

(6d) まさに、来県できない方々、特に、海外の移民、移住者の方の子弟の方たちについ

て、やはり双方向と言うか、皆さんが大会の一部になってもらうことを考えると、資料６（大会スケジュール）の時間、時差を見ると、これをライブ配信したとしても、皆さん、なかなか見る時間帯じゃないのかなと思う。見るだけではなく、現地ブラジルやボリビアからも発信するということがあって、それも大会の一部とすることを考えてもいいのではないかと思う。

(6e) これまでのウチナーンチュ大会、あるいは、ウチナーネットワークを支えてきたのは、そういう海外に移民した移住者、その子弟の皆さんであったりするので、その人たちが発信する、本当に大会に参加している一部になっているということが、感じられるような仕掛けというのもあるといいなと思っている。

(6f) 特に今、県外にいてなかなか沖縄に行きがたい中で、もちろん沖縄の皆さんが、楽しいものを見せてくださるというのも、とても良いのだが、やはりそれを見る県外の人たち、しかも沖縄に直接関係がない、移民とか移住者とかではない人たちでも、本土の人間が、一緒になって考えられるような、沖縄に心を寄せる良い機会になると思うし、心を寄せる機会になって欲しい。

(6g) 第７回大会にオンラインでも参加して、沖縄と一緒になって、このウチナーネットワークを知ると、すごく良いことがあるのだとか、そういうふうに思えるような発信をしていかないといけないのかなと思う。

(6h) みんなが、そこに心を一つに目指すものがあって、それぞれにやることをやって、それを県外の人から見た時に「沖縄ってやっぱり凄いよね。一緒になってやって行きたいな」って思う様なものになるその一つに、繋ぐものっていうのが、今、この資料からだと散逸化しているような感じがあるので、なにか一つ繋ぐものっていうのが、あると良いのかなと思う。おそらく過去の大会の方が、そこが、非常にはっきりしていた様な気もするので、昔に返るじゃないが、どうしてこの大会を今やるのかというのを、みんながシェアできるような、何かこう、ピシっと言い表せると良いと思う。

(6i) おそらくこの大会が始まった時に、ウチナーンチュとしてのアイデンティティ、海外ネットワークに関する万国津梁会議でもずいぶん議論したアイデンティティの部分、そこをみんなが確信するというか、或いは、そこを拠り所にして、絆をさらに再確認して、深めていこうという、そういうところがあっただろうなというふうに、今回、資料をまとめる過程でもう一度調べ直して思ったが、今回、もっと知ってもらおうということもあると思う。

(6j) 知ってもらおうというところで、みんなが「そうだね」と言って、一つになって集えるかどうかというところだと思うので、これからの宣伝というか、方法次第だと思うが、やはりみんなが「一緒にこれをやっているのだ」、「盛り上げていくのだ」、「それは沖縄県の外も、地球の真裏もみんなそうなのだ」と思えるような、何かそういうものが本当に共有されるというのが重要だと思うので、そこが言葉遣いとか表現が、いろいろあると思うけれども、何かあの時の過去の大会で、みんなが感じていた強さみたいなものを、もう一度シェアできるような取組を実際の大会までにしていく必要があるのかなというふうに今、聞いていて思った。

7. 新垣誠委員

(7a) 今回、初のハイブリッド開催ということで、オンライン配信のロジスティックスや方法に関しては、新垣旬子委員が指摘したような通信環境の問題、担当する業者のキャパシティ、割り当てられる予算などに拘束され、ある程度、できる範囲が決まっていると思います。これまで沖縄県では平和祈念資料館が主管する「平和の思い」などの事業で、海外数カ国を結んでのオンライン事業を実施しており、各事業のキャパシティと費用との関係も把握していますでしょうし、委託する業者でも 3 年目に入るコロナ禍である程度、ノウハウの蓄積もあると思います。

(7b) 第 7 回大会では「アイデンティティの確認」が今回のハイブリッド開催にあたって、最も重要かつチャレンジングなテーマになると思う。自らが「ウチナーのシンカ」であり、その「世界の輪」を結ぶ一員であるというアイデンティティは、どうすれば共有できるか。かつて移民コミュニティのウチナーンチュ・アイデンティティは相互扶助を基盤とする「ユイマール」を持って醸成されていった。ハワイやブラジルなどで、ウチナーンチュ「シンカ」意識は、移民という「受難」（故郷・家族との別れ、ホスト社会における差別や困難など）の体験、そしてそれを乗り越えるために必要だった助け合い、特に重要だったのは経済的支援「模合」を通した相互扶助で形成されてきた。

(7c) あれから何世代も経ったが、海外のホスト社会でほとんどのウチナーンチュは「民族的マイノリティ」であり、自らのルーツについて考えざるを得ない状況が続いている。また沖縄県においても特に日本復帰以降は、「本土並み」スローガンのもと急速な「日本文化・社会への同化」が進み、若い世代間では沖縄の言語や文化、「ユイマール」などの価値観や相互扶助の地域生活が失われつつある。

(7d) 世界全体がコロナ禍にある中での大会開催の意味は、この世界的「受難」を、ウチナーンチュ「シンカ」意識を持って、「世界の輪」というグローバルネットワークで、どう乗り切れるか、ということではないか。第一回大会では、帰郷、家族親戚・友人との再会

など、「シンカ」意識が大会会場にも溢れていました。時代が進むにつれて、そもそもウチナーネットワークの基盤となっていた「ユイマール」精神や相互扶助の関係性が実感しづらくなり、大会はフェスティビティを中心として「イベント化」、「お祭り化」していった。しかしながら、それはある意味、時代の変化に伴う自然な変化なのかなと思う。なぜなら一世の時代と比較して海外のウチナーンチュも沖縄のウチナーンチュも物質的に豊かになり、助け合わなければ生きていけないと感じた世代から、親睦を中心とした世代の交流に移行してきたからである。

(7e) 「ウチナーンチュ・アイデンティティ」を求心力にした交流は、肝心の「ウチナーンチュ」の心が何たるか、そのアイデンティティの中心には何があるのか、といった本質に共感し、その心を共有すること無しには、いずれ形骸化していくであろう。海外県人会への若者の参加率の低下や、アイデンティティの希薄化も、その本質を実践・継承の難しさにあると思う。ビギンの「島んちゅの宝」にある、「教科書に書いてある事だけじゃわからない」、「きっとここにあるはず」の何となく意識しているその大切な宝を大会のテーマを通して言語化し、さらに単なるスローガンで終わらせないために実践し、共有し、共感の輪を広げ結んでいく必要があると思う。

(7f) 教育や啓発活動を通して「移民の歴史」学習が大会のコンテンツとして提案されたが、それだけで「シンカ」意識や共感を生み出すには十分とは思えない。私自身、沖縄で沖縄の歴史をいくら学んでも、「ウチナーンチュ」を意識することはなかった。ウチナーンチュ「シンカ」である自分自身を意識したのは留学中、北米沖縄県人会でメンバーとして「ユイマール」を実践・実感した時であった。シンカ意識を実感できるために必要なのは、「共感のコミュニティ」の形成。その共感を生み出すためには、「移民の歴史」という知識に加え、実体験を必要とする。自分の行動が、その大きな歴史の流れの一部であると感じるときに、人は共感し、共同体の一員であるという意識を持つ。

(7g) 今日、世界は「コロナ禍」という受難の真っ只中にいます。世界のウチナーンチュと沖縄のウチナーンチュも例外ではありません。沖縄そして海外で多くのシンカが直面しているはずの苦境に全く触れる事なく、単なる”Festival”（祭り）として本大会を開催することに違和感を持つ。

(7h) 「ユイマール」を実感・共感する仕掛けとして、クラウドファンディングの仕組みを利用したチャリティー募金、「世界ユイマール募金」を事業の一環として盛り込んではどうか。「繋ぐもの」、「一緒にやる」ものの一例として。

(7i) ハワイ沖縄連合会は、ここ数年、9 月に開催される “Okinawan Festival ~Sharing

Uchinanchu Aloha~”をオンラインで開催してきた。その一環として、コロナ禍で打撃を受けたウチナーンチュ経営のレストランを募金で支援している。これはハワイのウチナーンチュ・コミュニティが、その相互扶助の歴史に自らの存在を見出し、現在においてもその精神を継承しようとする試みでもある。またオフィシャル・オンラインストアも開設しており、連合会のグッズを販売して活動資金に充てている。

(7j) WUB もしくは WYUA、あるいはコンシェルジュでもいいのだが、大会のグッズや若い世代が身に纏って自らのアイデンティティを誇示できるようなファッションやグッズの販売を担当し、その売り上げを世界的にウチナーンチュのコロナ救済にあてるような取り組みができないか。県内のアーティストやクリエーター、伝統工芸を司る職人たちの作品、コロナで滞った観光産業で行き場を失った特産品（ワールド・ウチナーンチュ・バザールのオンライン開催）などを、アイデンティティの継承に活用することで、県内の産業に新たな活路を見出せないか。県内と海外のウチナーンチュによる共同デザインのロゴやプリントなども発展性のあるプロジェクトとして案件化できるのでは、と思う。

(7k) 沖縄と海外コミュニティとの助け合いの歴史は、戦前の仕送りから戦後の救済運動、県人会館建設支援から首里城復興支援に至るまで、脈々と続いている。沖縄県内（市町村レベル）へのコロナ支援のための募金、また海外コミュニティの困窮家庭やビジネスに対する支援を、プロジェクト化し、お互いに募金を通して実践する。どのような団体や個人に支援が必要かは、それこそネットワークを通して議論し協働しながら決定する。沖縄対海外である必要もなく、大会開催中、参加者がどこのコミュニティへ募金してもいい。集まった募金は各県人会もしくは WYUA 支部が管理・配分を行う。もちろん募金は強制ではないが、一部の大会のコンテンツを有料化し、その収益を全額募金へ回す手もあるでしょう。集金の配分を考える作業は、ネットワーク内における「富の配分」であり、現代における相互扶助がどうあるべきかを考える良い機会だと思う。ネットワーク内にも存在するグローバルサウスとの格差や差別的社会構造を学び、ネットワーク内の福祉を作り出すという意味でも、ぜひコンシェルジュの若いメンバーに担当していただきたい。「世界の輪」を「結ぶ」実践の機会を設けることで、その支援を通して「世界のウチナーンチュ」の一員「シンカ」であることを実感してもらう。もう一度、世界的ユイマールの精神を蘇らせる。そんな試みができないか、考えています。戦後の救済運動で、ハワイや南米の県人会がチャリティーで募金を実施し、そのお金で救援物資を調達した歴史がある。これを「世界のウチナーネットワーク」全体で、大会を通して沖縄が主導して（県行政で旗振りする必要はありませんが）実施してみてはどうだろうか。連帯感や共同体意識を生むのは、受け身での YouTube での沖縄コンテンツ鑑賞やオンライン会議ではなく（それも有意義ですが)、コミットメントを伴ったプロジェクトやインタラクティブな協働であろう。
募金の仕組み作り、海外の各コミュニティにおける募金の使い道のニーズ把握などは、

そのノウハウを熟知している団体などに外注するのもいい。コンシェルジュができれば、なおいい。国内だと「ふるさと納税」で地元意識が高まる例もありますが、海外では宗教の影響もあり、チャリティー募金が日本よりも習慣化していることから、一定の効果が見込める。海外から沖縄への募金が集まり支援の有難さを感じることができれば、沖縄県内でも自分達が「世界の輪」の中のウチナーンチュ「シンカ」であることを意識してもらえるのではないだろうか。本大会を通して移民コミュニティにあった「ユイマール」精神、相互扶助の実践を今に蘇らせることはできないだろうか。その追体験はできないだろうか。その想いからの一提案である。

(7l) この試みを実践に移す場合に注意しなければならないことがある。現在、沖縄県が取り組んでいる SDGs は国連サミットがベースという基本的には、国家間の取り決めであり、「地球市民」意識の醸成であるとか「開発教育」の観点からは重要だが、大会のテーマとしてウチナーンチュ「シンカ」意識や「ウチナーンチュ・アイデンティティの継承」という観点からは、うまくバランスを取らないといけない。SDGs の理念はどちらかといえば基本的人権のような人類普遍のコスモポリタンな方向性だが、その反面「シンカ」意識は、越境的でありながらも固有の歴史的経験に根ざした極めて親密な感情に根ざした特異なものだからである。「ユイマール」精神や相互扶助は、もちろん人類普遍の価値観だが、これをウチナーンチュ固有の「移民の歴史」に位置づけることで、はじめて「シンカ」意識が形成される。「世界のウチナーンチュ」という概念は、常に矛盾する（ように見える）二つのベクトルに引かれながら緊張関係を保っている。「世界へ」開かれるグローバルな意識と、「ウチナーンチュ」という極めてローカルな意識である。本大会においても、この二つのベクトルを意識しつつ、そのバランスを取りながら事業を展開することがカギだと考える。

(7m) （まとめ）そもそも沖縄県が、海外ウチナーンチュとのネットワーク構築やウチナーンチュ・アイデンティティの継承をなぜ重要視するのでしょうか。資源にも土地にも乏しい東シナ海の小さな島が、そのグローバルな「人的資源」に注目するとき、それはある一部の民族に見られる資本増強を目的としたビジネスネットワークなのでしょうか。琉球の歴史や移民の体験を振り返っても、それは万国津梁と相互扶助の精神で「結われた」シンカたちのネットワークではないのでしょうか。その真髄は、パンデミックのようなグローバル危機を、国家の枠を超えて共に乗り越えていくソフトパワーにあると思います。かつて移民一世は、その知恵と勇気、開拓精神と忍耐力というソフトパワーによって、様々な危機を乗り越え豊かな二世の時代を築き上げました。

(7n) ウチナーネットワークは、多様性に支えられた寛容性によって成り立つ協働を基調とし、その多様性は世界に広がる人的関係資本にある。ネットワークを活用したビジネス交

流や経済発展も重要だが、その向こうにある「幸福」をも見据え、未だ叶わぬ「あま世」の実現を、世界のウチナーンチュが共に夢見るような大会になるように。

8. ウチナーネットワークコンシェルジュ（オブザーバー）

(8a) 県外や海外で、県人会に所属されていない個人の方がウチナーンチュ大会に参加する仕組み、その周知について、今回、力を入れていただけないかなと思った部分。
これまでコロナの中、オンラインでイベントや意見交換を海外の方たちと行ってきたが、その中でウチナーンチュ大会は、県人会に属していないと参加できないとか、また開会式・閉会式に参加するには、どうしたらいいのかというようなご質問を受けることが多々あった。

(8b) 今は県人会に所属されていない方たちも、今後、ウチナーネットワークの素晴らしさ、さらに、沖縄の文化を学びたいとなった時に、このウチナーンチュ大会をきっかけに、やっぱり県人会に入ってみようとなる流れにもなるかなと思うので、そういった個人の方達への配慮が一点目です。

(8c) 県内の一般の方が参加しやすい仕組みについて。やはり皆さんも発言されたとおり、どうしてもこの世界のウチナーンチュ大会というと移民された方たち、自分自身の親戚がいる方というふうに考えられる方がいるので、自分事にしにくいのかなということが懸念として挙げられると思う。ですから、やはり一般人が参加しやすい仕組みとしては、例えばだが、大会の実行委員会の団体の皆様、企業様がいるので、その方達に呼びかけて、大会の期間中に、例えば、半日なりのプログラムに参加してもらえるような仕組みを作るという形で、まず実行委員会の方たちの力を借りて参加できるような方法、仕組みがあればと思った。

(8d) 三点目が、特に今回、プログラムに関して言語への配慮が大切かと思っており、やはり、ウチナーネットワークコンシェルジュができたことで、英語を話す方々は多いが、スペイン語やポルトガル語は、世界のウチナーンチュの主要人口であるにもかかわらず、やはり言葉の壁があり交流ができなかったという人たちがいる。コンシェルジュができたことで、その人たちにとっても喜んでもらえた部分があるので、日本語、英語が中心になるのだとは思うが、特にポルトガル語、スペイン語圏の人たちに対しての周知や、プログラムや意義の説明等を充実して欲しいと思った。

(8e) 四点目は、ハイブリットに関すること。もちろんコロナの状況なので、とても重要だと思うが、その分、やはり時間や労力に関し、実際に対面で合う方とオンラインで会う方と双方配慮しないといけない。オンラインで簡単でしょって思う方々もいるかと思う

が、その両方、二つ開催することに対して、本当にスタッフや関係する人たちが、一緒になって作り上げていくこと、その難しさとかって言うのを考えて欲しい。

(8f)今後私たちが担っていくべき役目があり、私たちの立場かと思うので、大会事務局と連携しながら、参加した方たちがウチナーネットワークコンシェルジュと一緒に何か取り組みたいとか、何かこう次のステップに繋がるような仕組み作りを私たちも一緒にできたらなと思う。

(8g) 教育機関との連携というのはすごく重要だ。義務教育の中でどれだけウチナーネットワークに関することを伝えられる時間を作っていくかというところが、一番大変な部分かと思うので、その点を県や教育委員会の皆様と力を合わせていきたいと感じている。
また、海外との連携の場合には、まだまだコンシェルジュも不足している部分であり、交流から次につなげていくという場面でも、企業の皆様、先輩たちにご指導頂ければと思っている。

(8h) 一人でも参加できる世界のウチナーンチュ大会とか、こうしたキャッチフレーズ等を、今まで関わってこられなかったウチナーンチュの方たちに響く呼びかけをいかにできるかというところが一つポイントになるのかなと思っている。

(8i) 県人会が近くにあれば参加も所属もしやすい。近くにないという方、直接ご意見頂いた方が、いらっしゃるところの近くに県人会がなくて、少し離れたところに所属しようかということ等、いろいろ考えたようである。県人会の良さや県人会に入っての楽しみについて、大会に参加することで見えてくるところもあるのだろうから、余りそういう条件を設けずに参加できるような仕組み作りがあっても良いのではないか、ということを聞いたことがある。

(8j)　私も実はウチナーンチュ大会の記憶が凄くある。当時、学校で一校一国運動というのがあり、その時に確かハワイの人と繋がったという記憶が凄く思い出に残っていたので、教育現場に凄い影響力あると感じている。
資料６にあったゴールデンタイムと思われる９時、日本時間の９時ぐらいからの時間帯の開いているところに、学校現場と繋がれるイベント等を盛り込むと凄く良いのかなと感じている。

(8k) 人手が足りない市町村がウチナーンチュ大会の時、資料展示等をしやすい環境を作ってもらえると、とても市町村がやり易いのではないかと感じた。

(81) 教育現場からスタートすることで跡が残り、種を蒔いていくという形になるから、非常に良いことと思う。